

情熱と絆

平成二〇年五月二〇日。東京・千代田区のルポール麹町で、恒例のライフプラン講演会が開催されました。今回は、出場二回目で全国高校ラグビー大会で優勝を果たし、TVドラマ「スクール☆ウォーズ」のモデルともなった京都市立伏見工業高等学校ラグビー部の総監督山口良治さんをお迎えして、その教育論をうかがいました



山口 良治
伏見工業高校ラグビー部総監督
環太平洋大学学監

【やまぐち よしはる】1943年福井県美浜町生まれ。日本体育大学卒。1966年ラグビー日本代表入りを果たす。1974年京都市立伏見工業高校に着任、1981年同校ラグビー部を全国高校ラグビー大会優勝まで導く。生徒への体当たりの指導が評判を呼び、「スクールウォーズ」のモデルとなる。

..... 教育は子どもの側の問題か？

皆さんこんにちは。ご紹介にあずかりました山口です。

私はラグビーというスポーツのお陰で素晴らしいことを学ばせていただきました。生きる力と言いますが、目標に向かって前進する力を学ばせてもらったという気がいたします。ラグビーを通じて多くの子どもたちに出会ってきましたが、どの子どもたちも素晴らしい可能性を持っているとつくづく感じています。そして私は、この子らの将来のためにきつと役立つことができ

るという自負を持っています。実際、私と出会った子どもたちは確実に変わってくれました。しかし、残念なことに多くの教師や学者たちは、子どもを判断するのに現在、能力があるかどうか、良いか悪いかだけの基準で決めてしまっています。その子のどこが悪いのか？ なぜできないのか？ どうしたらできるようになるか？ こうしたところまで突き詰めないで判断してしまいません。私は、教育とは子どもの側の問題か？ とずっと疑問に思ってきましたが、やっぱり教育は、子どもの側の問題ではなく、大人の側の問題で

す。家庭や親の問題であり、学校や教師の問題です。この意識を変えない限り、問題の解決はありえないと思います。

今回も日本一になって皆さんの前で講演したかったんですが、残念ながら決勝戦で負けてしまいました。相手は三〇〇〇人の男子校です。サッカーも野球もラグビーも強い。それに引き換え、伏見工業高校は五七〇人。そのうち女子生徒が一〇〇人、ラグビー部員は九〇人です。相手はゴツイ生徒がそろっています。正直、羨ましかった。こんな選手でチームを組めば毎年優勝

して見せると思いました。

人は皆測り知れない力を持つて いる

しかし、目に見える大きさや速さだけでは測れないものがあります。こうしたことを強化して相手に勝つところにやりがいがあります。大きな相手には勝てないというのであれば最初から

試合などしないほうがよい。

これを教えてくださったのが昭和四一年から四六年までラグビー日本代表監督を務められた大西鐵之祐先生です。私が日本代表として出場した昭和四六年のイングランドxv戦の秩父宮ラグビー場控え室のことでした。試合前の控え室は殺気立っていました。ロッカーを殴る者。壁に体当たりする者。全員の気持ちが高揚していました。

こんな中に、「用意

はいいか！」と大西先生が入ってこれると全員をギロリと睨み、「日本ラグビーのためにお前たちの命をくれ」と切り出されました。「お前たちに日本のラグビーを任した。死ぬ気のないやつは今すぐジャージを脱げ」

素焼きの盃を出して一人ひとりに水盃を差し出された後、その盃を床にバシーンと叩きつけ「骨は拾ってやる。死んでこい！」とグラウンドに送り出されました。「ウォーン」と

いう地面が震えるようなスタンドの歓声に迎えられ、「ピピーツ」と試合開始のホイッスルを聞いたと思った瞬間、試合は終わっていました。九〇分の時間が一瞬で過ぎ去っていました。残念ながらあと一歩のところまで勝てませんでした。

全部の退路を絶たれたら、あのときのような状態にまでなれるんです。退路を絶たれて迷いが消えたとき、体格で一回りも二回りも大きい相手にバチン、バチンと全員がタックルして倒しました。そこには恐怖心も何もありません。日本ラグビー史の中でこれほど素晴らしい試合はないという戦いをさせていただきました。人は自分が気付かないところにまだまだ大きな可能性を秘めていると思います。全部自分でブレーキをかけているのだと思います。

夢を語る大切さ

昔、伏見工業高校のラグビー部は、私の名前を取って山口収容所と呼ばれていました。どんな子も入部させ、いったん入ったら決して辞めさせないからです。後に全日本で活躍した大八木も入学試験のときに見つけた子でした。中学時代はサッカーのキーパーでしたが、まったく球技のセンスはありませんでした。相撲を取るとコロコロ負け

るし、懸垂は一回もできない子でした。それが、あんなに立派になってくれました。本当に子どもは変わります。

私は、さまざまな境遇の子どもたちに接してきましたが、「あかん！」と言っただけは一度もありません。特にラグビー部に入部した部員たちには「これから一生お前たちとつきあうぞ！」という思いを込めて力いっぱい全員と握手します。こうした方法で多くの子どもたちと接してきました。指導者にとって大切なことは、ドキドキするような将来につながる夢を伝えてあげることです。「あかん、あかん」と言うことよりも、「ナイスキックや！」「ナイスパスや！」といった一言をタイミングよく、心の底から言っただけでかどうかです。練習すればスクリーンパスやスクリーンキックができるようになる。これは子どもたちにとって感動です。これができたとき「よし、よくできた」と心から褒めてあげてください。こうした感動の場面をたくさん作り、与えていただきたい。

この子たちには俺が必要だ

私は昭和四八年の英仏遠征を最後に現役を退きました。その後、京都市教育委員会の辞令を受けて市内の中学校の教師になりましたが、この中学



校がとんでもないところでした。生徒は先生の言うことを聞かず授業にも出ません。とんでもない生徒たちでした。本当に腹が立った。生徒にはなく、そうした生徒に注意もしない先生たちに腹が立ったんです。まるで見捨てられたような生徒に対し、「俺だったらこいつらにこうしてあげられる。こんな思いにもさせてやれる」という思いがフツフツと湧き、「この子たちにとつて俺は絶対必要だ」と思ったのです。これが私の教師生活の原点でした。この問題児たちに出合わなかったらおそろく教師を続けていなかったでしょう。

その後昭和四九年四月一日、伏見

工業高校のラグビー部顧問に就任しました。「よし、俺はやるぞ！」勇んで学校に向かいました。きつとラグビー部の連中が並んで私を出迎えてくれるだろうな、と想像しながら校門に着くと、そこには誰もいませんでした。グラウンドに行くとゴールポストもありません。片隅に「All For One One For All」と書いてあるラグビー部のボックスを見つけて開けて見ると、中はタバコの吸殻でいっぱいでした。悲しかった。ほんま冷たい歓迎でした。

後日、校長先生がラグビー部の生徒を集めて「山口先生は、全日本ラグビーチームの選手として活躍され…」と紹介してくれましたが、「何が日本代

表や、ワイら関係あらへんわ」「先生は監督と違うんやろ。ほっといてくれや！」本当にひどかった。

練習中、生徒がグラウンドに横たわっています。「オイ！ 一体どうしたんだ」と心配して駆けつけると、ボールを枕に昼寝です。「うっさいなワレ。うっとうしんじやい」。先生に対して「ワレ」です。ほんまにボコボコにしてやろうかと思いました。授業中にバイクで階段をブオンブオンブオンと飛び越えて廊下を走ったり、自転車で二人乗りして鼻歌を歌いながら走り回る生徒もいました。しかし、注意する先生は誰一人していませんでした。

使命感のないところに力は湧きません。「俺はこの学校に何をしに来たんや！」「生徒を無視して何の教育か？」こんな思いが湧き上がってきました。無視される生徒は寂しくて耐えられないはず。叱りつけられても、やつたらダメなことを指摘されても、教師に関心を持ってもらうことがうれしいのです。

当時、伏見工業高校の生徒は「誇り」を失っていました。かつては建築界に立派な人材を輩出し、甲子園や朝日レガッタにも出場した高校でしたが、私が着任したころは最悪の状況でした。「ええことで一番になりたい」と願いました。そうしたとき思ったのが、

私が青春を賭けたラグビーでした。ラグビーを通じてこいつらを立派に育てようと思った瞬間、私の眼には伏見工業高校のグラウンドが西京極のスタンドと重なり、選手たちが決勝戦を闘っている姿が浮かびました。「ピピーツ」抱き合っている部員や先生、父母たちがいました。「伏見工業高校初優勝！」と書かれた新聞を広げて、自慢気に子どもたちに見せる卒業生の姿も見えました。「よし、これだ！ この熱い感動を絶対に実現するんだ」と決心しました。

一二対〇の大敗

翌年の昭和五〇年、私はラグビー部の監督に就任しました。「よし。やるぞ！」はち切れるような思いでグラウンドに出ました。野球部やサッカー部は練習していましたが、ラグビー部員は誰もいません。教室で一年生の部員を見つけてわけを聞くと、先輩から「うっとおしい山口が監督になったから、練習には行くな」と止められていました。「そんな先輩はほっといて、今から練習しよう」と一年生三人を引き連れて稲荷山をランニングしました。これが私の監督就任第一日目でした。やがて春季大会の日程が発表され、

一回戦で全国大会準優勝三回の花園高校と当たることになりました。一方は全国大会準優勝校、一方は雨が降れば練習もしないようなボロボロのチームです。

五月一六日、吉祥院のグラウンドで試合開始のホイッスルが鳴りました。「同じ高校生が同じルールで闘うんだ。準優勝校といっても勝てないわけがない」という私に、パーマをかけてお尻が出そうならいにパンツを下げた部員たちは、「頑張ろうけー」「いっちょよう、やったろうけー」と言いながら出て行きました。試合は伏見工業高校のキックオフで始まり、そのボールを奪った花園の選手が見事なパスワークを展開し、数十秒後に素晴らしいトライを決めました。珍しいノーホイッスルトライです。これをきつかけにボコボコにやられました。「何をほけつとつ立つてるんじや。タックルせんかい」と激を飛ばす私に、「何をわめいとるんじや。ワレ！」「オフサイド」と注意するレフリーにも「何がオフサイドじゃ。ボケ！」。こんな試合でした。一二対〇で負けました。一トライが三点の時代ですからこんな大差がつく試合は本当に珍しかった。嘲笑的でした。「ざまあみやがれ山口。お前に伏見工業高校のラグビー部の面倒なんか見れるかい」と言われているように感じて、い

でも立つてもらえませんでした。

..... 新生ラグビー部誕生の産声

「でも、本当に悔しい思いをしているのは選手ではないか」「俺は今まであいつらに何をやってやったのだろうか」「全日本の代表選手だったことを理由にして、ああしろ、こうしろ、と上からばかり子どもたちに接してこなかっただろうか？ こんな思いが突然こみ上げ、初めて自分に向かって悔恨の念が湧き起こりました。

こんな気持ちで選手たちを待つていましたが、戻ってきた選手のジャージを見ると泥一つついてなく、誰一人として悔しそうな顔をしていません。タックルをしないから当たり前です。

私は悔しさが涙が溢れてきました。

私の中の何かがはじけ飛びました。「同じ人間として同じルールで闘い、お前たちは一一二対〇で負けたんだ。悔しいと思わないのか。それでも男か！」と叫んでいました。叫び声と涙でぐしゃぐしゃになった私の顔を見て、キャプテンの小畑が突然体を震わせ「くやしい。ちくしょう」泣き崩れました。これが、新生伏見工業高校ラグビー部の産声でした。「お前らはどうなんだ。悔しくないのか？」すると、荒木が、西川が、西村が、石田が次々と、「く

やしい。花園に勝ちたい」と泣き崩れました。

これが出発点でした。ラグビー部はメキメキと力をつけ、翌五年の秋季大会の決勝戦でついに宿敵花園高校に勝ちました。誰も伏見工業高校が優勝すると思っていなかったのが、優勝花園高校、準優勝伏見工業高校と書かれた賞状が事前に準備してあり、「準」の文字を鉛筆で消した優勝の賞状をもらいました。

..... 優しきは強き

「どうなりたい？」「どうしたい？」いつも問いつけることで子どもたちはメキメキと変わります。今の世の中は、子どもたちにとって本当に冷たいと思います。ほんま、もつと構ってやりた

い。「今どきの中学生は…、高校生は…」と批評するだけの大人や教育者が多過ぎます。自分の子ども注意できないような親がいます。給食費を払わな親が増えています。本当に給食費が払えないというのなら別問題ですが、親の自己責任をきちんと果たす社会であつて欲しいと思います。あんな人になりたいな、あんな先生になりたいなという子どもたちの目標たり得る大人、そんな存在であつていただきたい。私は、お年寄りが電車で立っている

のに平気で席を独占していた大学の運動部の学生に注意したことがあります。情けないと思います。スポーツは素晴らしいと言われますが、ただやりさえすればいいのではありません。ただ勝ち負けのためだけに体を鍛えるのではなく、席を譲るような優しさを養うことも大切なことです。これを教えられないような指導者は指導者足り得ません。我がラグビー部の子どもたちは決して座りません。何でもないことです。

そのために体を鍛えているのです。こうした優しい子どもでもチームを作ると強いチームになります。優しきとは何か？ 試合に出られないチームメートの気持ちを受け止めてやれる心です。「俺の分までタックルしてくれよ」

「絶対俺の分までスクラムを組んでくれ」と叫ぶその気持ちを受け止めて「絶対お前らの分までやってやる」と誓い合い、泣きながらグラウンドに飛び出す後ろ姿を見ると、私は「よし、今日の試合は絶対負けな

い」という気持ちになるのです。優しさを子どもたちから引き出せるとき真の強さが現れます。

今年も三三人の生徒が入部しました。九〇人の部員のうち六〇人は私の教え子の教え子たちです。孫のようなものです。本当にすごい絆だと、心から感謝しています。

国や地方行政においていろいろな問題が起こっていますが、どうぞ皆さん、きちんと襟を正して「あんな人になりたいな」という目標足り得る存在であつてほしいと思います。素晴らしい仕事をされますように。この言葉をもつて終わりとさせていただきます。

